

## 現地を訪問して思うこと

世継 由海（1984・産社）

東日本大震災から3年3ヶ月が過ぎようとしていた頃、東北応援ツアーの案内が届きました。

震災直後は仮設住宅に食器を送る運動に参加したり少額ながら寄付したりしていましたが、最近では寄付を行っている企業の商品を購入することくらいしかしていなかったのが、被災地に対して何も出来ていないという思いが大変強くなってきていました。高校3年生の娘が学校で芝の研究をしており、塩害を受けた被災地の緑化に役立てるために何度も被災地に足を運んでいたこともあり、余計に自分は何も出来ていないという思いで居ました。また、色々なシーンで被災地に対する皆の意識が薄れてきている気がしていた時期でもあったため、思い切って応援ツアーに応募しました。

ツアー初日、全国各地から仙台駅に集合した校友の皆さんの中に身を置くと、初対面の方ばかりだということに不思議なことにとっても親近感があり、隣に立っておられた東京から参加の校友にそう話したところ、立命だからじゃないですかね東京の大学とかじゃそういう感覚はない気がしますよと言われ、なるほど立命マジックか！と何だか嬉しくなりました。

そして観光バスでの移動中には、現地のバスガイドさんが当時の様子や今の状況などを分かりやすく思いを込めて話して下さいました。

最初は観光バスで被災地に乗り込むのはいかがなものかと思いましたが、観光で良いから東北へ足を運ぶこと、東北の生産品を購入すること、話題にすることを被災された方々は望んでいる、忘れられるのが一番辛いことだとバスガイドさんから聞き、また当日が11日月命日に当たったため各所で花を手向けていた方々がバスを見て手を振って下さっている姿を目にして、悪いことではなかったのだと納得しました。

そのあと石巻で校友の木村さんが営む木の屋石巻水産さんを訪れました。津波で何トンもある鯨の大和煮缶を模った看板が500mも内陸部に流されたと聞き、津波の威力を感じました。また訪れた町の各所に再建された建物には津波到達地点のプレートが設置されており、想像以上の高さで津波が押し寄せたことが一目で分かるようになっていて、当時逃げる方々がその高さにどんなに大きな恐怖を感じられたかと思うと胸が締め付けられる思いがしました。

木の屋さんが全壊した工場の再建を決意された後、様々な審査を経てやっと財源が確保出来て実現に至ったお話を聞き、「再建費の1/4を自己資金で、3/4を国の補助で実現出来た。3/4は税金なので皆さんの工場です。」と言って頂いた時には少しはお役に立てているのかなと涙が出ました。また、最新のキッチンを備えた研修室で鯨のステーキを振舞って下さるなど色々とおもてなしをして頂き、鯨のステーキの柔らかさと美味しさも心に沁みました。

石巻を後にして訪れた女川町では、観光協会の阿部さんが方言で被災の様子を語って下さり、震災で地盤沈下した地域の底上げ工事が着々と進み、町全体が復興に向かっている様子が伝わりました。そのお話の中で、避難する途中に家族を心配して戻った人達が皆津波の犠牲になった、一人で逃げて助かったらその夜は避難所で心細く寂しい思いをするかも知れないが、生きていれば必ずまた会える、一番大事なことは寂しくても「一人で逃げる」「命を守る」ことだと言われたことがとても実感がこもっていて心に残りました。

初日の夜は日本三景の一つ松島が宿泊地でした。松島は沿岸部にある大小200以上の島々のおかげで津波の威力が軽減されて、浸水の被害はあったものの住民の命と観光地としての景観は守られたと聞き、翌日実際に訪れた観光フェリー発着場付近にはピーク時には及ばないものの多くの観光客で賑わっていました。東北の沿岸各地が一日も早く賑わいを取り戻せるよう祈らずにはいられませんでした。

夜の宿舎での勉強会では笹蒲鉾の「ささ圭」を経営されておられる校友の佐々木さんご夫妻から、被害の大きさでその名を知られた名取市の閑上地区で営まれていた工場の被災から再建までの様子をお聞かせ頂きました。

木の屋さんとささ圭さんのお話を聞き、被災地の復興にはまだまだ資金面での援助が必要だと感じました。衆議院の解散総選挙が決まりましたが、被災地支援を本気で考えて意見をあげられる議員が一人でも多く選出されるこ

とを祈る気持ちです。

2 日目に閑上地区を車窓から見て言葉を失いました。果てしなく見える雑草の草原には 3 年半前のあの日まで、びっしりと住宅が建ち並び各屋根の下には温かい家庭の営みがあったのだと考えると、見ていて本当に辛かったです。

そして同じ閑上小学校区内でも、東部自動車道を挟んで明暗が分かれたとのお話を聞き、同じ学区内で被害に大きな差があるのはお互いにとっても辛いことと予測できましたし、底上げ工事についても一日も早い復興を望む声と、まだ行方不明の方が多くおられる閑上地区においては埋めてしまっただけでは最後と思う気持ちが強くて足並みが揃わないというお話を聞いて、東日本大震災の復興の難しさを感じました。「ささ圭」の女将靖子さんが、被災後は他の被災地を訪れたことがないと話しておられるのをお聞きして、他を訪れるという気持ちの余裕がなかったこともお察し出来ましたが、同じ被災された方々も何か気遣いをされて互いの交流を控えておられるように感じました。宮城県内でも、沿岸地区と内陸部とでは被害の状況が全く違っており、自治体としての復興への取り組みの難しさを改めて感じました。

過去には阪神淡路大震災の 3 年での復興がありましたが、こちらは被災範囲が比較的狭い地域に限定されていましたが、揺れによる建物の被害が中心で、火災もありましたが津波のような何もかもごっそりと消失してしまうような被害とはまた違っていました。東日本大震災では揺れによる被害より、津波による本当に広範囲の被害で、同一県内・市内においても被害の度合いが全く異なっているために、復興に向かう足並みを揃えることは大変難しいと感じました。

遠く離れたところに住んでいる自分が今後被災地のために何か出来るとしたら、東北の復興にこれからもずっと関心を持って、チャンスがあれば観光でいいから東北を訪れること、東北の物産を購入すること、そして周りの人にも関心が薄れていかないように話題にすることではないかと思いました。また機会を見つけて東北へ出掛けたいと思います。

大事なことは、被災地のこと失われた命のことを「忘れない」ことだと感じました。

今回初めて校友会の大きなイベントに参加しましたが、皆さん初対面とは思えない雰囲気、同じ R の学び舎で過ごした仲間として世代を超えた一体感がありました。この雰囲気は是非他の校友の皆さんにも味わって頂きたいと思いました。

末筆ながら、企画実行にご尽力下さった立命館大学校友会東日本大震災復興支援事業執行部の皆様と宮城県校友会の皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございました。